

庶民に根づく寺参り

ベトナムを旅して

ニューヨーク州立大学教授 伊藤 博

ベトナム社会主義共和国は九州を除く日本の面積と同じで、南北にS字型に細長く延びています。約七千四百万の人口のうち、七〇%以上が農村に住んでいます。特に北部红河デルタと南部メコンデルタに集中しています。ベトナムの北部は日本の田園風景に似ており、首都ハノイは中国の雲南省にまでさかのぼる红河デルタの中にあり、湖の多い静かな街です。特に、ホアンキエム湖上には、文学の神や十三世紀にモンゴルの侵略を撃退した英雄たちを祀った王

山祠があり、ハノイ市民の憩いの中心地になっています。

ハノイの東百キロ、トンキン湾に北ベトナム最大の港・ハイフォンがあります。その北端にある海の桂林と喩えられるハロン湾は風光明媚で有名です。大小数百もの石灰岩が風雨に浸食され、沖の海面に連立し墨絵の様な奇岩となっています。その間を行きかう帆船は山水画になる程です。

「北属南進」と植民地化

ベトナムは約九〇%のキン族（又はベト族とも言う）と五十以上の少数民族から成る多民族の国です。キン族は主に平野部に、少数民族の多くは山地に住んできました。でも最近、平地部の人口過剰を減らし、又山間部の経済開発の為に、キン族も山間部に移住させられてきたそうです。

秦始皇帝の南方征服（紀元前二一四年）にベトナム人のことが記されていますが、ベトナム人の起源は、紀元前四世紀頃、中国浙江省の北部に居た越が楚に亡ぼされ、その一部が今の北ベトナムに移住してきたことに始まると言われています。又、「北属南進」の言葉にも表わされているように、中国朝廷の干渉を撃退しつつ、同時に南方の他民族を支配し、拡大し続けてきました。ベトナム中央部に位置するダナンはイ

ンドネシア系土着民であるチャム人の王国チャンパの首府として栄えていましたが、十五世紀末、南下してきたベトナム人に滅ぼされました。十八世紀半ばにはカンボジア系のクメール王国も征服され、メコンデルタ地域は完全にベトナムに統合されました。征服人と非征服者との混血の結果、現在のベトナム人にはチャム人やクメール人の血と文化が加わっています。

ペリーの黒船が日本に來航してから五年後（一八五八年）、フランス軍艦がダナン港に侵入し、植民地化が始まりました。ダナンと古都フエの間に眺望の良いハイヴァン峠があります。昔からの軍事上の要塞で第二次大戦中、日本軍も通ったことがあります。

一九七五年四月、北の軍事力によって統一され、長い外国による支配が終わりました。旧南ベトナムの社会主義体制への編入と人々の再教育は色々な形で行なわれてきました。元サイゴ

ンと呼ばれたホーチミン市にある旧大統領官邸は統一会堂と呼ばれ、迎賓館として使われていますが、同時に、旧ブルジョアがいかに人民とかけ離れた贅沢な暮らしをしていたかを見せる教育の道具ともなっています。又、米軍の戦車や大砲を展示した戦争犯罪館や、対照的に立派なホーチミン記念館が目を引きまます。

ハノイ市

ベトナム国家の形成は中国を単に模倣したのではなく、王権と族長それに農民とが、中国と朝貢関係を保ちつつ、政治・経済・文化の面でベトナム独自のものを築きあげました。他面、日本同様、古代ベトナムは中国の制度を大規模に摂取してきたことは自明の事実です。千年以上も中国の支配下にあったベトナムでもハノイが一番その影響を反映しています。ハノイ市内にある文廟は十一世紀に建てられたベトナム最

古の儒学に基づいた大学ですが、その構内にある小判形の屋根瓦を葺いた美しい奎文閣には官吏の登龍門であった科挙試験に合格した者の名前が彫ってあります。十五世紀から三百年間もの間行われたテストに受かったたくさんの名前は八十二もの石碑に彫ってあり、その一つ一つは異なった顔をした亀の石台の上に乗っているというユーモラスなものです。これらの高級官吏が安南王朝の中央政府を取り仕切っていたわけですが、地方の村落では国の農地を村役人に委ねていました。村の長老も一般農民も封建制の中では村の集りに参加しましたが、連帯責任の方が重く、内には一致団結、外には無関心と閉鎖性を固持しました。ベトナム社会主義政権の下、もはや村の実力者は地主や儒学者ではありませんが、この伝統的な村意識が国家建設の妨げにもなっております。

安南王朝は一〇〇〇年から一九四五年まで四



朝もの長い間続きましたが、その中心地は最後のグエン朝を除いてトンキンでした。従って安南仏教を物語るベトナムの大乗仏教の遺跡はハノイ近郊に散在しています。その代表的なものの一つが一〇四九年に建てられたハノイの延祐寺（別名一柱寺）です。一本の柱の上に建てられている木造の一風変わった寺で、その由来は先の太宗が夢の中で、蓮華の上に乗った観音を見た。そして、一人の子供を夢の中でさすけられたそうです。あるいは、観音が太宗を蓮華の上に招いたとも言われています。この夢を見られたことを感謝して、蓮華に見たてた寺を建てられたそうです。

元「フランス極東学院」の建物にあるハノイ博物館には種々の仏教遺品が展示してあります。十一世紀の仏像はベトナム女性を型どったかのように、しなやかな体形で腰まわりが細くくびれているのが印象的です。他にドンソン朝

の銅器は高度の技術をしのばせます。銅鼓はもと銅釜として使われていましたが、後に葬式、儀礼や雨乞いなどにも使われ、幾何学文様や鳥の羽をまとった人物なども彫ってあります。銅の棺や舟形棺もあります。さらに、安南焼きの陶磁器は日本でも出土されているようで、十六世紀に栄えたホイアン日本人町と共に当時ベトナムと交易のあったことを物語っています。

ホーチミン市

ホーチミン市内北部にある永厳寺は修道僧も居る大きなお寺で、たえず参拝客で賑わっています。特に七重の塔は大きく、各層には仏像が安置され花が添えてあります。その塔の反対側の境内には京都で鑄造され一九六九年、鶴見の總持寺より寄贈された「平和の鐘」がひっそりとつりさがっています。鐘には「日本の佛子こ

ぞりて捧げる。平和の鐘はベトナムに鳴る」と彫られています。鐘堂の左中央は本堂で入口の「万古弗諼、永巖家風、千秋番火」の額がこのお寺の心を物語っています。本堂の裏側には、線香や御供え物を持った老若男女がお祈りしています。広い境内では、小鳥屋から買った檻の中の小鳥をお祈りの後、ふたを開けて逃がしてやり、功德をつむ姿も見えます。

ベトナムの旧暦の一日と十五日に近所のお寺にお参りに行く週間は社会主義政権の下でも行なわれています。三十^{セツ}もある中国式線香を焚き、年寄りには長生きや健康を、商人は商売繁盛を祈ります。チヨン中国人街にはたくさんのお寺があり、天后聖母を祀るキエンハオ寺（別名・天后宮）は螺旋状の一^ルもある線香が無数に天井からつり下がって煙でもうもうとしています。お寺に行かない人たちも店頭でお祈りするのが日常行事になっています。但し家の中に

仏壇は見られず、亡くなった家族の写真が飾ってあるだけです。葬儀にはお坊さんを家に呼んでお経をあげることがありますが、都会ではそうしない家族も多くあります。仏教の葬儀は東南アジア特有で派手です。死者との関係で白黄赤等の異なった色の鉢巻をした子供たちが墓地に向かう行列の先導となり、黒か茶色の喪服の大人たちが「千秋永別」とか「四方極楽」と書いた派手なノボリを持って、静かに歩きます。そして最後に柩を担いだ男たちが土葬の地に向かいます。遺体は三年後に掘り出され、古い墓地に移されます。

永巖寺で若い修道僧に英語を教えるグエン・カオ・ヒーさんも一九七五年以降の社会主義教育を受けた一人ですが、ベトナムの宗教の自由はそれ以降確立されたとのこと。共産党は人々の信仰を完全に禁止すると庶民を苛立たせるため、社会主義のイデオロギーに著しく反さない

限り許しているものと思われれます。そして僧侶は自分たちで食事を作ったり、信者からの供え物に頼り、お経の勉強と念仏に努めています。

市の北外れにあるホーチミン歴史博物館には青銅の観音像が展示されていますが、頭上に化仏を乗せ二本ないし四本の臂（かいな、うで）にして、上半身が裸で、中国南部に栄た大理国（十―十三世紀）の観音像にも似ていると言われています。さらに、二世紀に南部ベトナムからカンボジアにかけて勢力を誇った扶南国の貿易の中心と考えられるオケオ遺跡からの発掘品もたくさんあります。インドが地中海の諸国と交易した品々、特にローマ帝国の遺品や中国の後漢時代の鏡を見ると、ベトナムが海のシルクロードとしても活躍したことが窺えます。

古都フエとチャム文化

フエ市はフォン川の川辺にある静かな落ち着

いた古い都です。ここにある王宮にはグエン王朝の九帝王が住みました。フエ出身で越南高等仏教院に勤めていたホアン・トロン・ソウさんは横浜善光寺留学僧育英会の援助でベトナム仏教の研究を日本でしている方ですが、彼の弟さんにフエを案内してもらったことが出来ました。

グエン朝のジャロン帝が一八〇九年に建てた国旗掲揚塔が目印の王宮がベトナム王朝と文化の遺産です。中国の紫禁城を真似て作った正面の大和殿は帝王への拝殿です。そこに入る石畳は三段で、位に応じて、貴族が並びました。拝殿の内部には、グエン朝の即位に使った金箔の椅子と台が置いてあります。その左裏のお城の形をした建物は王朝の菩提寺である顕臨閣であり、内部には歴代の皇帝の幟と車が展示され、庭には各王の偉大さや善徳・輝き等をシンボルで彫った巨大な青銅の鼎が九つ置かれています。いずれも王朝を正統化し、不動なものとする

る祈願を表しています。

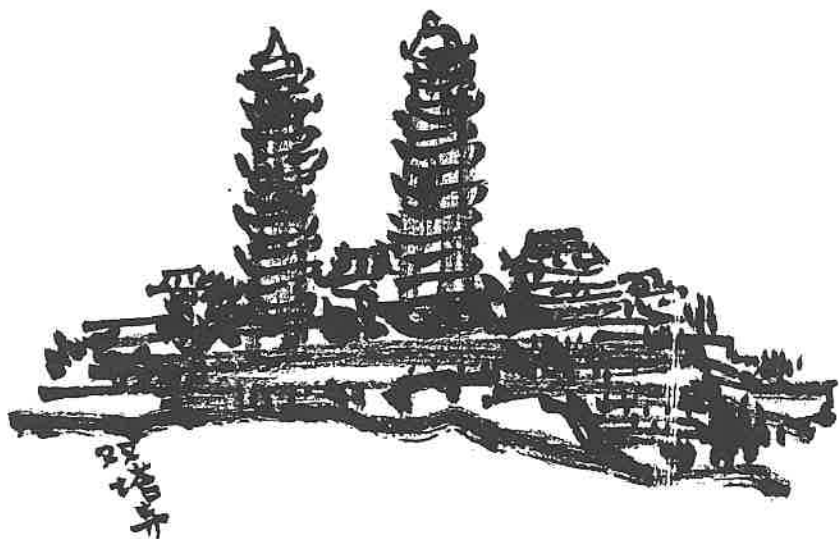
しかし、フエを中心とするグエン朝の傑作は周辺にある六代の霊廟にあります。皇帝の在世中から造られ、権力と統率力を示す廟は三つの部分から成り立っています。先ず入口に一番近い所には、皇帝の功績をたたえる石碑が立ち、二番目に祭壇と寺院があり、最後にお墓があります。又、必ず、極楽を象徴する蓮池が作られています。特にトゥドウック帝廟（二八六四年）の池は有名で、門を入ると、正面に大きな蓮池と釣殿が見え、池の左手に皇帝を祀る大きな寺とその隣に石碑のある中庭、その奥にお墓があります。次に、カイディン帝廟は西洋風で知られています。山の急な丘陵を利用したこの廟に登るには長い石段を使いますが、その手すりには竜が刻まれ、階段の上の広場には馬や象や番人の石像が廟を守っています。一番高い所の墓の内部には金箔を捺した青銅製のカイディン帝

王の像があり、壁や天井は磁気やガラスでステンドグラスのように飾られており、目を見張る程の豪華さがあります。チュウチ帝の廟ははるかに小さく質素ですが、偶然、ベトナムの尼僧の一行が訪れており、このグエン廟が一層引き立って見えました。この廟のフォン川の対岸には高さ二十一メートルもある七層の美しい八角形のテイエンムー寺が見えます。一番上の階には釈迦牟尼仏像が安置されていますが、中心となる釈迦は青銅の仏像です。この仏像はタイソン党を破りグエン朝のジャロン帝を助け出したポルトガル人により造られたそうです。

古都フエはユネスコの世界文化遺産に指定されており、その中心の安南文化は中国の強い影響によるものですが、ベトナムのもう一つの文化はインドの影響の濃いチャム文明です。チャムパ国に遺跡はベトナム東海岸にそって散在していますが、遺構はレンガの積み上げで建てら

れ、塔堂（カラン）がその特徴です。カンボジアのクメール塔堂に似ており、砂岩の彫刻もかなり残っています。ダナン市内のハン川の畔にあるチャム美術館は世界的に知られ、チャンパの信仰したヒンドゥー教の神シバの石像など時代別に七ないし十四世紀のものが展示されています。例外として、ドン・ドゥオン地方からは青銅製の六ないし九世紀の作と思われる美しい仏陀像が発見され、これは南インド又はスリランカのアヌラダプラ期のものに似ているという人もいます。チャンパの諸王がヒンドゥー教に帰依したなか、八七五年、インドラヴァルマン二世が熱心な大乘仏教徒になったことが仏教遺構の起因になっていると思われる。高い椅子に坐り両手を両膝の上に乗せた仏像をチャム美術館で見ることが出来ます。

ベトナムはラオスとカンボジアと共にインドシナを構成していますが、インドとシナ（中国）



の両面の影響を受けていることを意味します。ベトナムの安南文化とチャム文化はその一例ですが、ベトナムの仏教は日本同様大乘仏教であり、ラオスやカンボジアの小乗仏教よりも親しみぶかいものです。

カオダイ教

形式的であれ、八〇%のベトナム人が仏教徒だそうですが、十六世紀にフランシスコ派宣教師によって伝道されたカトリックは南ベトナム社会を中心に根づき、今でも三百万人程の信者がおります。土曜の夜や日曜の朝など、ホーチミン市の統一会堂などでミサに参加する人々をたくさん見かけます。

さらに、教義のはっきりしないホアハオ教やカオダイ教のような新興宗教も南ベトナムに広まっています。特にメコンデルタに始まったカオダイ教は三百万の信者がいると言われています。

す。

一日四回行なう儀式には神として上台に坐る男女一人ずつの他に、九つの位に分かれた信者たちがバンドをかなで、シンバルが鳴りひびくなか、土下坐して礼拝します。建物のあちこちに描いてある聖なる「目」が見下ろす本部には観音様やマリアの像が置かれ、有名なベトナム人やレーニン、ビクトル・ユゴーそしてジャンヌ・ダルクらの写真が飾ってあります。混合宗教のため、仏教の業と輪廻、道教の神秘、儒教の倫理、カトリックの儀式を取り入れ、さらに道教や回教までも混ぜた奇妙なものです。教義はこれらの歴史上の預言者の生霊を通じて、神や死者とも連絡がとれると教えています。

カオダイ教は一九二六年、当地フランス植民地政府の公務員、ノー・バン・チューが始め、植民地主義に反対していたインテリや上層階級の間にも広まってゆきました。又、農民の中にも

植民地大農園主に農地を取られてしまうことへの反感から信者になりました。しかし、ベトナムも統一され社会主義になった今、信者の数はかなり減ったそうです。

ベトナムの社会経済

ベトナムは年間一人当たり三百ドルの国内総生産しかない貧しい国です。工業化と近代化を目指して、大統領や首相等の幹部の世代交代を計って、一九八六年以来の改革・開放路線（ドイモイ）を推進してきました。市場経済の導入や積極的対外開放の結果、一九八九年頃より成果が上がり、高度経済成長を達成しましたが、最近のアジア通貨不安定の悪影響が徐々に発生し、一九九七年以降外国投資の伸び悩みや輸出のにぶりが見られます。主要産業である農水産業や原油の輸出を活性化すべく国際化を進め、一九九五年には東南アジア諸国連合に、又アジ

ア太平洋経済協力にも加盟を認められ、中国とも友好関係を回復しました。さらに日本やアメリカをはじめ西側との国交改善の結果、援助も増えています。特に、日本はベトナムの最大の貿易相手国と援助国になりました。日本政府の開発援助の三分の一が対ベトナムに当てられています。

ベトナムの経済発展と共に汚職や麻薬それに貧困も悪化しました。一九九七年中頃より、地方役人の腐敗や生活困窮から農民暴動も散発的に発生しています。共産党一党体制を堅持しているベトナム政権は軍イデオロギー畑出身の党書記長を選び、反体制思想の抑圧と「和平演変」を取り締まるため警戒を強め始めました。又、経済復興よりもベトナムの伝統的思想や精神生活を重視する方向に向かっています。これが仏教をはじめとするベトナムの宗教界にどのような結果を及ぼすか注目する必要があるでしょう。